1.　まえがき

地球の今昔

地球は約 45 億年前に太陽系の惑星のひとつとして誕生し、いろいろの変遷を経て現在に至っています。その間、暖かい太陽の光が変わりなく地球に降り注いできましたが、何度かの極めて気温の低い氷河期や気温の高い間氷期を経験しました。1720 年にファーレンファイトが温度計を発明してから、世界各地の気温が比較的正確に測定されるようになりましたが、20 世紀の半からは世界各地の平均気温が少しづつ高くなる傾向が見られています。この気温上昇の変化は単なる氷河期、間氷期のサイクルの１つなのかもしれません。また、世界各地で発生している種々の天変地異の頻度がこの気温上昇に関連するかのように上がっているように感じられます。通信の発達により瞬時に広く情報が世界中を流れるために天変地異がしばしば発生しているように感じられるだけなのかもしれませんが、気温の上昇と天変地異の頻度の間に関連性があるのかもしれません。地球を征服したと思いあがっている人類は石油をどんどん燃やして地球狭しと動き回り、生活環境を快適にすべく夏は冷房を冬は暖房をし、昼間のように煌々と灯りを点して昼夜の別なく活動しています。自然の摂理に反するようなこの人類の驕りと贅沢が気温の上昇をもたらし、ひいては度重なる天変地異を引き起こす原因となっているのかもしれません。

もし人類の贅沢が気温の上昇、大気の汚染、自然の破壊などを引き起こし、これらの変化を原因とする天変地異が地球環境の破壊に繋がるものであれば、由々しき問題と考えなければなりません。そこで本書では人類の贅沢を化学的に検討してみようと思います。関連性が明らかになるようであれば、よりよい地球環境にして行くための反省の材料になるものと思われます。

人類の横暴な贅沢の現状

人類が動物の一種として地球上に進化してから数万年になりますが、その間に人類はより安定したより快適な生活をするために肉体を使い、知恵を絞ってきました。常に食べるものに困らないように食料を貯蔵するようになりました。雨露を避け寒さを凌ぐために、木の下や洞窟などに生活していましたが、自分でねぐらを作るようになり次第に家屋が形成されるようになりました。外界から身体を守るためには衣服を着用する知恵も生まれてきました。このように、文明の初期には自然界にある材料を集めてきて簡単な加工を加えたものでしたから、小鳥が木の梢に巣を作ったり、蜜蜂が花の蜜を溜め込むのと同じで、物質の変化の上では全く自然現象を乱すものではありませんでした。

人類を含めて全ての生物は種を保存し繁殖するために、生命活動を続けています。2 種以上の種がその繁殖のために競合するときには、互いに争い滅ぼしあう弱肉強食、自然淘汰という自然の摂理が働きます。文明が発展するにつれて、確実に食料を得るために農耕が始まり、森を焼いたり、野に水を引き入れたりするようになりました。原生していた木草を取り除いて、食料の供給に適した作物を移植するようになりました。耐久性に富んだ毛皮や織物を着用するようにもなりました。この時点で人類は既に多少自然に手を加え、自然現象を乱すようになりましたが、人類の生活に必要な自然の破壊に限られており、弱肉強食、自然淘汰という自然の

摂理を逸脱するものではありませんでした。人類が生活を維持し、繁殖するための最小限の自然破壊ですから、この程度では人類の贅沢とは考えられないと思われます。

近年になって知識や技術が進歩向上するにつれて、人類は安定した生活、快適な生活を飽くなきまでに追及するようになりました。子々孫々の代までの食料を安定して確保するために、食料を大量に溜め込むようになりました。必要な栄養を摂取するための食料から、しだいに趣向を加味した食物に変化してゆきました。この段階では必要以上の食糧を生産しているのですから、人類は食料の安定供給や味覚の満足という贅沢を始めたことになります。繊維を色々と染め上げて華やかな衣服を織り上げるようになりましたが、これも気持ちを晴れやかにし、他の人と差別するための人類の贅沢の始まりでしょう。雨露を凌ぎ外敵から身を守るための住居も大きく堅牢なものになってきました。焚き火を囲んで夜の暗闇から逃れていましたが、ローソクを点して暗黒の世界を駆逐することができるようになりました。これも生活を快適にするための人類の贅沢の始まりでしょう。

さらに、文明の進歩とともに人類の贅沢は限りなく増大してゆきました。現代では、人類の食料を牛や豚や鶏に食べさせて、食肉や鶏卵や乳製品として食卓に並べていますが、この変換効率は決して高いものではありません。魚屋さんには春先でも秋刀魚が並び、隣のショーケースにはアフリカの近海で獲れたマグロの刺身が売られています。夏野菜の胡瓜やトマトは冬でも店頭にあふれ、イチゴの最盛期はクリスマスの時期に移ってしまいました。比較的収穫量の少ないコシヒカリやササニシキが珍重され、さらに糠として玄米の 10%以上も精米してしまいます。2004 年に農水省が日本の家庭を調査した結果では、このように多くのエネルギーを無駄遣いして作った食物の約 8%を食べることなく捨ててしまっています。

2005 年の夏からはクールビズなる運動が展開されました。しかし未だに、真夏の猛暑の中でも男性は背広にネクタイをして冷房の利いたオフィスで働いていますから、腰の周りに毛布を巻いて寒さ除けをしながら多くの女性が同じオフィスで事務を取っています。厳寒の真冬に室内を強く暖房し、スリップドレスにミニスカートの女性がアイスクリームを好んで食べています。定員が 5 人以上もある大きな自動車に 1 人だけで乗って、多くの人が遠い道のりを通勤しています。日の長い夏など、日の出から数時間も寝静まっていて街に殆ど活気が出てきませんが、その同じ街が日の沈んでから賑わい始めます。東京都心の新宿、渋谷、池袋、六本木の街角では終日眠ることなくネオンが瞬き活動しています。弥次さんや喜多さんは江戸から京都まで 10 日以上をかけて旅したそうですが、新幹線は 150 分ほどで旅人を運んでしまいます。そのため多くの人が安直に大した用事もなく東京と京都の間を往復しています。東京やロンドンやニューヨークを往き来する旅行者の中には、比較的重要でない用事や仕事以外の用件のための

旅行者が多く含まれており、大部分の人は地球狭しと動き回る必要もありません。殆どの場合は単なる航空燃料の無駄遣いに過ぎません。現代の人類、特に都市部に生活する人類はとてつもない贅沢をしており、その例は枚挙にいとまがありません。

さらに、軍事行動はその本質自体が殺戮と破壊を目的とし、全く生産性のない浪費です。アメリカ合衆国からはるかに遠く離れたペルシャ湾まで数万トンもある航空母艦を航行してゆき、イラク各地を爆撃して破壊を続けています。航行のための燃料、爆撃機のジェット燃料、爆撃のための火薬、その他諸々の戦略物資の消費は膨大なものでしょう。攻撃のために多用されている各種のミサイルは燃料、爆薬、巡航用のエンジン、攻撃目標までの誘導制御装置など全て一度に消費してしまいます。戦争のための消費は全て、人類の本来的に必要な物質の消費とは全く無関係なものであり、人類の最大、最悪な贅沢と思われます。

人類が動物の一種として生活するために必要な最小限を超えて物質やエネルギーを消費することは、浪費であり、人類の贅沢と考えられます。さらに、人類との共存ができずに人類の贅沢の犠牲になり、多大の被害を被ったり、種の存続まで危うくされた生物がいることは、人類の横暴と云わざるを得ません。本書では環境省環境統計集の資料を基に、人類の贅沢によりどのような物質が浪費され、どのような物質が無為に生産されているか化学的に考察して、人類の無用の贅沢と横暴を戒める材料に出来ればと考えています。